





法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第71回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

 誰もがつながりを感じられる社会を目指して 

宮城県・仙台市立幸町中学校・3年

すず き こ はる
鈴 木 心 晴

今日もまた、テレビや新聞で様々な事件が報道されている。中でも、悲しく恐ろしい犯罪のニュースは、聞かない日はないと言ってもいいだろう。私は、それらを目にするたび、加害者はなんて凶悪で憎らしい人なのだろう、と無条件に嫌悪感を抱いていた。そう、あの本を開くまでは。

この夏休みに、抜けるような青空の写真にひかれ、偶然手にした一冊の本。それは、罪を犯し、奈良少年刑務所に収容されている少年達の詩集だった。

彼らの詩は、私の予想とは正反対に素直な言葉で書かれていた。その中ににじむ後悔や反省には心が揺さぶられた。涙がこらえきれない作品もあった。その真つすぐで、時に優しさあふれる言葉が、強盗、傷害、殺人といった恐ろしい罪を犯した人から発せられたなんて信じられなかった。

それらの詩は、受刑者の立ち直りを目指すプログラムの中で書かれたそうだ。

「ぼくのすきな色は 青色です
つぎにすきな色は 赤色です」

例えばこのように、ある受刑者が自分で書いた詩を発表する。すると他の受刑者が、

「好きな色を教えてもらって嬉しかった。」
と感想を伝えるといった内容だ。私は初め、たったそれだけのやり取りに何の意味があるのか全く分からなかった。

読み進めると、その詩を書いた彼は、好きな色を尋ねられたことさえないほどに、誰からも関心を向けられたことがなかったと分かった。皮肉に

も、刑務所で初めて気持ちを受け止められ、それが心から嬉しかったと読み衝撃を受けた。さらに、幼稚園や小学校に通った経験がなかったり、大好きな両親から虐待を受け続けたりと、辛く苦しい幼少時代を過ごした人が少なくないことも知った。それがどれだけ寂しく孤独かを想像しただけで、胸が詰まる思いがした。

もちろん、犯罪は決して許されるものではない。しかし、罪を犯すに至るまでの彼らの壮絶な状況を思うと、彼らだけの責任とは言い切れない、誰かが気づいて思いを受け止めていたら、育ってきた環境が少しでも違っていたら、と思わずにいられなかった。実際に、詩を認められて自信を回復し、立ち直っていく受刑者の姿がそれを物語っていると感じた。

今自分の周りを見回すと、家族、友達、先生、困った時に話を聞いてくれる多くの人の顔が思い浮かぶ。思いをぶつけ、互いに許し、笑い合える人がいるその環境が、実はとても幸せで心強いことだと改めて感じた。たった一人でも自分を受け止め認めてくれる誰かがいること、それこそが辛い時でも踏ん張り、前を向くパワーの源になると考えさせられた。

私は、「加害者は劣悪な人」と決めつけていたこれまでの自分を反省した。生まれながらの犯罪者などどこにもいないのだ。罪を犯した彼らの多くが、社会の中で居場所を無くし、隅に追いやられ、疎外感を感じた結果、踏みとどまれずに感情を爆発させてしまったのだと思えてならない。

人と人との関係の希薄さや、人々の無関心さが彼らを追い詰めたのだとしたら、これからは誰も孤独にさせない、つながりのある社会を作ることが大切だ。それにより犯罪を減らすことだってできるかもしれない。

そのために私達にできることは何だろう。その一つは「挨拶」ではないだろうか。

私の学校でも「あいさつ運動」が行われている。私も実際に挨拶をすることで、初めて言葉を交わす相手との間にも、安心感や信頼感が生まれることが実感できている。

挨拶は、「あなたと仲良くしたい」「あなたに関心を持っている」という大きなメッセージでもあると思う。された側は、「自分の存在が認められた」と感じ、気持ちが満たされていく。一言の挨拶をきっかけに会話が生まれ、そこからよりよい関係につながることもあるだろう。さらに、挨拶にはその場の雰囲気をも明るくしたり、笑顔を増やしたりと様々な効果もあ

る。また、挨拶の返答やその表情から、今相手が置かれている状況を想像し、寄り添い、言葉を掛けることだって可能だ。しかも、人と人をつなぐその方法は、僅かな心掛けと、ほんの数秒の時間さえあれば、誰にでも簡単に実行できるのだ。

私は今、相手に伝わる挨拶ができているだろうか。まずは自分から、家族、学校、地域の中で、自分の心を開き、気持ちを届けられるような挨拶を心掛けよう。

小さな心掛けが社会全体に広がって、全ての人が「自分は社会の大切な一員だ」とつながりを実感できるようになったら嬉しい。そしていつか、刑務所さえも必要なくなるような、そんな明るく温かい社会になる日が来ることを願っている。